

「昭和村における移住・定住、空き家対策の課題と解決策」

大学 (成果報告書作成者)	福島大学行政学類塩谷法社会学演習 塩谷弘康(教授)、石崎開人(4年)、木村慎平(4年)、黒川倫(4年)、佐藤優多(4年)、高橋拓也(4年)、藤原裕太(4年)、佐藤琉海奈(3年)、長谷川显裕(3年)
自治体	昭和村役場産業建設課観光交流係
その他関係者	
(1)調査研究の 課題・背景	移住・定住対策や空き家対策が全国的な課題となるなか、昭和村においてはカスミソウやからむし織を活かし、社会増を実現している。しかし、その一方で、移住者・定住者向けの住まいが不足するという課題を抱えている。 そこで、本調査では課題解決に向けて、①空き家バンクへの登録が進まない理由等を明らかにして移住・定住者向けの住まいを確保する、②移住希望者に対して、デジタル技術も使いながら昭和村の魅力を効率的に発信する、③移住者と地元住民の交流と相互理解を進め双方にとって幸せな移住・定住を実現する、ことを具体的に検討する。
(2)令和5年度 調査研究活動内 容	移住者と空き家所有者を対象にした量的調査(アンケート調査)を実施した。また、その結果を踏まえて座談会を実施するとともに、会津美里町における移住・定住対策、空き家対策についてヒアリングを実施した。 I アンケート調査の実施(12月下旬～1月中旬、郵便で送付・回収) 調査票原案作成のうえ移住者用アンケート検討会(12月15日) 移住者用アンケート:対象者数67人、有効回答者数30人(44.8%) 空き家所有者用アンケート:対象者数150人、有効回答者数59世帯(39.3%) II 座談会の開催(2月21日、旧喰丸小学校) 3つのテーマについて、5名の移住者(4名はカスミソウ農家)と意見交換を行った。 ① 役場職員、カスミソウ農家、からむし織の織姫など、職業や所属コミュニティを超えた交流のために何が必要か ② 地区の普請(共同作業)や近所づきあいについてどう考えるか ③ 空き家の利活用、解体のために村はどのような支援を行うべきか III 会津美里町でのヒアリング(2月22日、COBACO) 会津美里町政策財政課人口対策係と一般社団法人TORCHから、会津美里町の空き家の状況(件数、地区、状態、管理、利用実態など)や、住まいるバンクの制度内容、活用状況、TORCHの活動内容、空き家・地区と移住希望者とのマッチングについてヒアリングを実施した。

(3)令和5年度 時点の結果	今年度の調査研究を通じて、①移住者同士の交流の場の拡大、②普請（共同作業）への参加、③近所付き合いの改善、④移住者用住まいの確保、⑤空き家バンクの周知、の5つの課題が明らかになった。各課題の概要は次の通りである。 ①移住者の約9割が交流を希望しているが、所属コミュニティ（役場、花農家、織姫等）を超えた交流の機会が少ない。 ②多くの移住者は普請に参加しているが仕事が忙しくて参加できない時期がある。また、昭和村を稼ぎの場としてしか考えていない人、村内に居住していても普請に参加しない人も存在する。 ③村の人間関係の親密さを評価する声が多いが、村の習慣や風習に馴染めないという声もある。 ④空き家の多くが築古であり、「賃貸用」「売却用」の空き家は少ない。また、所有者は売買、移住者は希望しており、両者の間にギャップがある。 ⑤空き家バンクについて内容も含めて知っている人は4分の1以下にとどまる。また、空き家バンクに登録しない一番の理由は、「制度がよく分からないから」である。
(4)提言または 今後の展開	(3)を踏まえた、各課題に対する提言と今後の課題は次の通りである。 ①移住者をケアする組織をつくり、息の長い支援を行う。移住者をケアする組織や村役場が、移住者の興味のあるようなサークル・同好会など交流の場を紹介する。移住者をケアする組織の具体化が今後の課題である。 ②移住者のケアをする組織が情報提供やアドバイスを行う。ガイドブックを作成して、移住者に地区のことを知ってもらうとともに、地区住民にも普請のあり方を考えてもらう。移住ガイドブックの作成に向けた住民のヒアリングが今後の課題である。 ③ガイドブックを作成し、移住者と地区住民のすれ違いの解消に努める。②と同様、移住ガイドブックの作成に向けた住民のヒアリングが今後の課題である。 ④空き家所有者（予備軍も含む）に対する意向調査などの早期のアプローチを行う、村側から空き家の適正管理をサポートする、村内・村外に在住している人向けの対面相談会を実施する。空き家所有者と移住者のギャップの解消、たまに利用するような空き家の管理・利活用方法、早期のアプローチの具体化が今後の課題である。